



LEGO® Architecture

帝国ホテル

日本 東京





© Ayuko Yonezu

帝国ホテル

いまや伝説となったフランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテルが1923年に開業すると、近代国家日本が印象づけられました。

ホテルはすぐに東京で最も有名なランドマークとなり、日本とともに華やかでドラマチックな歴史を歩むことになります。建物は1968年に取り壊されました。その後、その象徴的な玄関中央部は愛知県の博物館明治村に移築されています。

Courtesy of the Frank Lloyd Wright Foundation



© Alamy.com

建築史上の地位

初代の帝国ホテルは木造3階建てのヴィクトリア調様式で、皇居からほど近い場所に建てられました。1890年に開業した当時は、日本で唯一のヨーロッパスタイルのホテルでした。1915年頃になると、増え続ける滞在客に対応できなくなり、古くなった建物を新しく現代的なものに建て替えることになりました。

東洋と西洋の文化の橋渡しとなってくれる西洋の建築家を探していた帝国ホテルのオーナーは、フランク・ロイド・ライトに新生帝国ホテルの設計と建築を依頼したのです。いろいろな意味で、ライトは理想的な人選でした。彼は親日家であり、特に1905年に初めて日本を訪れて以来、熱烈な浮世絵のコレクターになりました。

ライトは帝国ホテルの建築にたずさわることで長く東京に滞在できることを喜び、1916年から1922年の間、断続的ながらこのプロジェクトに注力しました。当初の彼のゴールは、多くの人々に訴えかけるだけでなく、日本文化を真に尊重する建物を設計することでした。

250室を有するホテルは建物全体がホテルのロゴのような形をしており、ゲストルーム棟は「H」型になっていました。パブリックルームはちょうど「H」の中棒にあたる「I」の形をしていて、小さくて背の高い中央棟に配置されました。草案となったデザインは見事なまでに美しく、印象的なものでした。

設計と建設

ライトは18~20人の製図技師とともに帝国ホテルの設計に取り組みましたが、彼以外の外国人はシカゴ出身の熟練技術者、ポール・ミューラーだけでした。

設計と建設を進める上で最初に大きな懸案となったのは、東京で頻発する地震に耐えうる建物をいかにしてつくるかということでした。ライトはよく、何世紀も自然災害に耐えた日本の建築物を「地面の上に軽く建てられている」と言い表していました。

2.4メートルの表土の下に18~21メートルの沖積地が広がる土地では、従来の基礎に必要な剛性は得られませんでした。代わりに彼が考えたのは、浅く広い基礎を使って地面の上に建物を浮かせることでした。こうすることで、ライトいわく「ウェイターの指先に乗るトレイのようにバランスを取る」ことが可能となります。

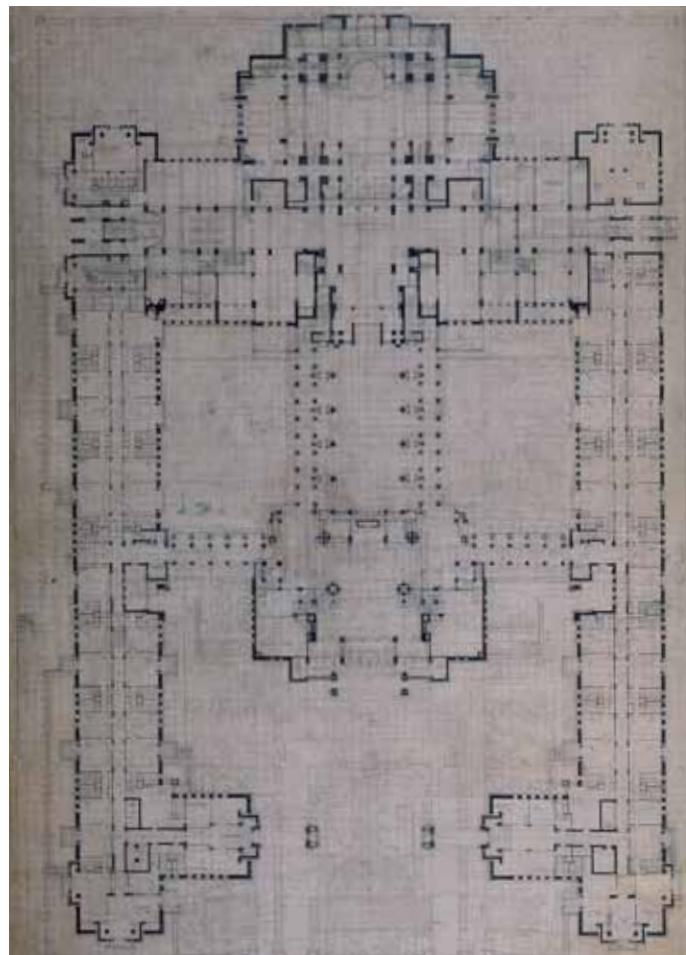
そのほかにも、地震の脅威に耐えるために、さまざまな設計を施しました。たとえば床とバルコニーを片持式にして強度を増大させたほか、建物に沿って20メートルごとに地震動を分離する結合部を置きました。そして低層階に行くほど厚くなるテーオー壁を採用し、破壊に対する耐性が高くなるようになめらかなカーブを全体的に施しました。

主要部分の材料は現場打ち鉄筋コンクリートと煉瓦コンクリートで、また火山性岩石の大谷石を使用することで、大規模で精巧な彫刻や装飾が可能となりました。ライトは日本の石工の職人芸に深く感銘を受けていたため、彼らの才能を最大限に生かせるように、当初の装飾のアイディアを大幅に修正しました。

調度品は申し分ないものでした。家具は特定の座席区域やレストラン用にデザインされたものです。壁をかざったのは、クジャクをはじめ、複雑な模様の大谷石の彫刻です。そして天井は手塗りされ、内外壁には金箔が施されました。100枚以上のラグとカーペットにはライト自身がデザインした抽象的で幾何学的な模様が加えられ、すぐに中国で織り上げられました。

新生帝国ホテルは1923年9月1日、ついに誕生したのです。そして同じ日、巨大地震が東京周辺をおそいました。

ライトは当時ロサンゼルスについて、情報が錯綜する中、ホテルが無事だったということを確認するまでに10日間を要しました。帝国ホテルが大地震に耐えた数少ない建物のひとつとなれたのは、まさにライトのユニークなデザインのおかげと言えるでしょう。



トップ: Courtesy of the Frank Lloyd Wright Foundation / ボトム: © Frank Lloyd Wright Foundation

Courtesy of the Frank Lloyd Wright Foundation



建築家について

間違いなくアメリカで最も偉大であり、世界的にも最も才能豊かな建築家であるフランク・ロイド・ライトは、みなぎる情熱の持ち主でもありました。74年以上にわたるキャリアの中で900以上の作品を残し、住宅、オフィス、教会、学校、図書館、橋、美術館など、あらゆる建物の設計にたずさわりました。その内の500以上は実際に完成しました。そして今日、実際に400以上の建物がその姿を残しています。

ライトの創造性は建築に限ったことではありませんでした。家具、織物、工芸グラス、ランプ、食器、銀製品、リネン、グラフィックアートなどのデザインも手がけました。また、作家として多くの作品を残しただけでなく、教育者、そして哲学者でもありました。20冊の本と数え切れないほどの記事を執筆し、米国と欧州で講演を行いました。

ライトはアメリカ南北戦争が終った2年後の1867年、ウィスコンシン州のリッチランドセンターといいなかの農村に生まれました。そして1959年に91才でその生涯を終えました。ライトが高校とウィスコンシン大学マディソン校に通ったことは確かですが、どちらも卒業した記録はありません。1887年、ライトはシカゴに移り住み、1890年代初め頃には、アドラー・アンド・サリヴァン事務所で製図技師のリーダーにまでなりました。

建築家であり芸術家であるライトは、極東の中でも特に日本文化に興味をいただき、刺激を受けました。日本では6つの建物の設計、落成にたずさわりましたが、最も有名なのが帝国ホテルです。

ライトは建築仲間の間ですばらしい建築家であると評され、現在もなお崇拜されています。ライトほど周囲の環境をたくみに利用した建築家はいません。またライトほど「住まい」が持つ意味を大切にした建築家はいません。そして次の名言を残しました:「建物はたんなる場所ではない。存在のあり方そのものだ」



OBMA © F. L. Wright Foundation

今日のホテル



1968年までに、ライトが設計した帝国ホテルは数々の地震を耐えぬきました。この間、日本の人口は増加し、深刻化する公害が原因で大谷石の精巧な彫刻やその他の装飾部分は一部劣化してしまいました。多くの人々が利用してきた帝国ホテル。

ホテルの経営陣は、この象徴的な日本のランドマークを取り壊すという苦渋の決断をし、より大規模なホテルへの建て替えを断行しました。しかしホテルの中央玄関部だけは慎重に取りはずされ、愛知県の博物館明治村に移築されました。

帝国ホテルのデータ

場所: 日本 東京
設計者: フランク・ロイド・ライト
建築期間: 1916-1923年
建物の種類: ホテル:客室数250室、ボールルーム5室、バンケットルーム10室
建築材料: 鉄筋コンクリートおよび煉瓦コンクリート
工費: 約600万円
延べ床面積: 34.765m² (114,058.399 平方フィート)



© Frank Lloyd Wright Foundation

ホテルの詳細



ホテルの浅い基礎は「ウェイターの指先に乗るトレイのようにバランスを取る」ことが可能になるとライトは考えました。

© Frank Lloyd Wright



1923年9月1日に発生した関東大震災は当時では最大の地震でした。マグニチュード7.9を記録しました。

© Wikipedia.org



ライトはロビーの外に浅いプールを配置し、地震の後によく発生する火災に対応するための水源を確保しました。

© Christophe Richard



地震の際に危険ながれき被害を引き起こす従来の重い瓦の代わりに、ライトは軽量の銅屋根を使用しました。

© Christophe Richard



建物の周囲を囲む銅の雨どいは、精巧につくられたかけいを雨水が通るように工夫されていました。

Courtesy of the Frank Lloyd Wright Foundation



7年間におよぶ建築期間の内の4年間、約600人の職人が継続して雇用されました。

Courtesy of the Frank Lloyd Wright Foundation

デザイナーあいさつ

このモデルをデザインするにあたって、レゴ社設計者として自分に3つの目標を定めました。ひとつはフランク・ロイド・ライトの特性を忠実にとらえること、そして日本の建物の性質を尊重しつつ強調すること、最後に、レゴ。アーキテクチャーシリーズにすでに存在するフランク・ロイド・ライトのセットに匹敵するくらい魅力的なものをつくることです。

まずはレゴ。ブロックで何を表現するかを選ぶことから始まりました。ホテル全体なのか、それとも博物館明治村に移築された玄関ロビーだけなのか。この玄関ロビーは私の強い願望に値すると判断しました。

玄関ロビーは比較的小さいですが、ぜいたくに装飾されています。そのため次の目標は、できるだけ多くの建築部分を再現しつつ、全体のモデルサイズをコンパクトにおさめることでした。非常に難しい断面図をさまざまな角度から作成することに始まり、窓をつけた立面図も同時に作成しました。

最終的に、さまざまなレゴ。ブロックの制作テクニックを駆使して全体的に調和の取れたモデルが完成しました。壁やサイドウォークの表現、ポッチを上に見せないデザイン、クリップ付きプレートにライトセーバーのパーツをはめて水平のアクセントをつけるなどのテクニックを盛り込みました。

帝国ホテルのモデルはレゴ社のデザインチームと協力し合ってつくりあげられました。彼らはレゴ。ブロックの完成モデルを組み立てる際、そのプロセスがユーザーにとってシンプルかつ理にかなっていて、楽しい体験であることを非常に重視しました。



「スケールモデル」シリーズ - 1960年代のレゴ。アーキテクチャー

レゴ。アーキテクチャーシリーズの歴史は1960年代初めまでさかのぼります。この時、レゴ。ブロックの人気は高まりつつありました。当時のレゴ社のオーナー、ゴッドフレッド・キアク・クリスチャンセンはレゴ。ブロックのシステムをさらに充実させる方法を模索していました。そしてデザイナーに対して、レゴ。ブロックに新たな価値を加えるパーツを考えるように課題を出したのです。

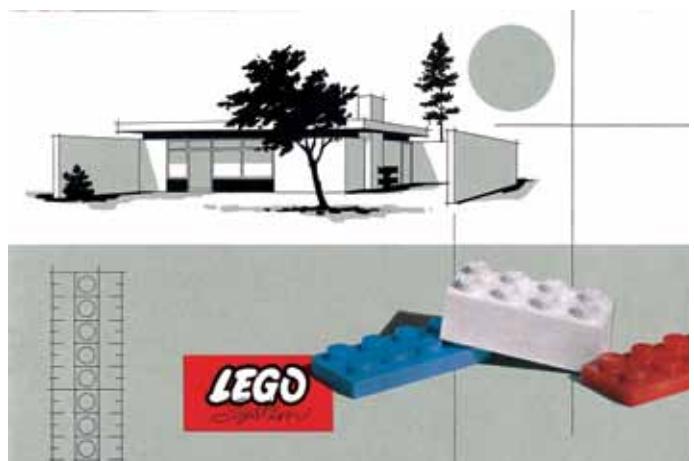
彼らの答えは革命的であると同時に驚くほどシンプルでした。従来のブロックにぴったり合うだけでなく、高さがわずか3分の1しかなかった5つのエレメントをつかったのです。これらの新しい「プレート」のおかげで、より詳細なモデルの設計が可能となりました。

レゴ。ブロックの可能性が高くなることは、その時代の精神とマッチするように思われました。この頃、モダニズムの建築家は家のあり方を見直し、人々は理想の家を建てるため、積極的にデザインに興味を持つようになりました。このようなトレンドの中、1962年初めにレゴ。ブロックの「スケールモデル」ラインが生まれました。

名前そのものが建築家やエンジニアの仕事に直結していく、さまざまなプロジェクトのスケールモデルがレゴ。ブロックのエレメントでつくられることが期待されていました。

今日のレゴ。アーキテクチャーシリーズと同様、スケールモデルのセットは通常の明るい色の箱とは違うデザインで、創造力が高まるように「建築ブック」が入っていました。

5つのエレメントは今もレゴ。ブロックの組み立てシステムに不可欠な要素となっていますが、スケールモデルシリーズ自体は1965年に廃番になりました。それから40年以上の時を経て、そのコンセプトは今日のレゴ。アーキテクチャーシリーズとして復活を遂げたのです。



参照リンク

<http://www.franklloydwright.org>
<http://designmuseum.org>
<http://wikipedia.org>

